佐伯通信
2018年8月（平成30）
第44号
発行
佐伯泰英事務所
担当／文藝春秋
禁・無断転載

台風接近の長崎にて

写真提供：佐伯泰英事務所
世界遺産に決まった外海の出津教会堂にて

長崎取材に行った。台風7号が九州に接近する直前のことだ。角力灘に面した外海を訪ねた折、潜伏キリシタンの集落十一か所が世界遺産に登録された翌日に、出津の教会堂に居合わせる幸運に恵まれた。庭に咲いたアジサイが祝に彩を添えていた。六割が信徒という出津の人びとが喜びの表情で私と娘を迎えてくれた。なんとも僥倖だった。江戸時代の外海を想像しつつ時を過ごした。

さてこの時節、熱海はアジサイならぬジャカランダの季節を迎えている。アジサイに似た色合いの花が熱海のシンボルとなったのは一九九〇年にポルトガルのカスカイスと姉妹都市となり、かの地からこの樹木を贈られたことが始まりだ。長年、古木の傍らを通りな

佐伯泰英／近刊のお知らせ

10月 10日

《光文社文庫》
吉原裏同心抄『木枯らしの』

11月 28日

《新潮文庫》
新・古着屋総兵衛 17『いざ帰りなん』
「佐伯通信」第45号が入ります。（初版の初回出荷分にのみ挟み込み）

12月 14日

《双葉文庫》
空也十番勝負 青春篇『未だ行ならず』上・下（仮）

※発売日は予定です

近刊・作品情報はこちらでもチェックできます。
http://www.saeki-bunko.jp　佐伯泰英　ウェブサイト　検索

2018年の「佐伯通信」は、佐伯泰英事務所が下記出版社の協力のもと発行いたします。
㈱文藝春秋、㈱新潮社、㈱光文社、㈱双葉社

夏の涼みは両国の……

文藝春秋文春文庫
「酔いどれ小籐次」シリーズ担当　**瀬尾 巧**

夏といえば、毎年恒例「新・酔いどれ小籐次」2ヵ月連続刊行！　7月発売の『椿落つ』に続き、本作『夏の雪』をお楽しみいただいていますか。時は両国の川開きが近づいた頃。余命いくばくかの元花火職人・俊吉から、彼の息子で半端な花火職人の華吉に技を伝える手助けのため、小籐次は一計を案じます。さて、夏の江戸にどんな大輪の花が咲くのでしょうか。

気風の良い江戸の人たちに感動して、実際に訪ねてみたくなる性分の私、ふら～と両国へ。巨大な東京スカイツリーをのぞむ両国橋は現在も賑やかです。折りしも、すみだ郷土文化資料館では特別展「隅田川花火の三九〇年」が開催中でした。寛永5年（1628）、徳川家康のブレーンだった天海僧正が浅草寺を訪れ、船遊びをしながら花火を鑑賞してから390年なのだそうです。「夕涼」「夜遊」と題した色鮮やかな花火の浮世絵が並ぶなか、「花火秘伝集」なる技術マニュアルには興味津々。「流星玉火」「いたち鼠」、打ち上げ花火の「大造之花火」などが絵入りで紹介されていました。みなさんも、お近くの花火大会で俊吉翁と華吉たち江戸の花火職人の粋を感じてください。

さて申し遅れましたが、昨夏、成田街道を1日で踏破した地獄の行軍（『冬日淡々』巻末付録参照）から編集担当となりました瀬尾です。今後ともよろしくお願い申し上げます。

がら、碑銘を知らずにきた。過日、銘板の文章を読んでカスカイスを訪ねたことを思い出した。五十年近く前のことだ。ユーラシア大陸最西端のロカ岬を訪れた。その旅はユーラシア大陸の東端に近いナホトカからシベリア鉄道に乗って始まった。ロカ岬に立ったことでユーラシアを東から西へほぼ横断したことになる。ポルトガルの詩人カモンイスの叙事詩『ウズ・ルジアダス』の「ここに地終わり、海始まる」の一節の記念碑の前で記念撮影をし、感慨に浸った。そのうえ当時は無料だったユーラシア大陸最西端訪問の日付入りの証明書を岬の観光案内所でもらった。その帰路にカスカイスに立ち寄ったのだが、いま思い出せば海と山に面した地形が熱海とよく似ていたことくらいしか記憶にない。台風の長崎でなんとなく過ぎし日の思い出に浸った。

「佐伯通信」第45号は、11月28日刊行予定の『新・古着屋総兵衛17 いざ帰りなん』（新潮文庫）に入ります。

文春文庫　赤目小籐次、痛快無比の大活躍！　画・横田美砂緒

新・酔いどれ小籐次シリーズ

①神隠し　②願かけ　③桜吹雪　④姉と弟　⑤柳に風
⑥らくだ　⑦大晦り　⑧夢三夜　⑨船参宮　⑩げんげ

〈最新刊〉
⑪椿落つ
⑫夏の雪
以下、続刊